第37回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部　最優秀賞

クララ、いっしょに走ろう

弟子屈小学校　森島　望さん

私はこの夏、一ぴきのクワガタを拾いました。そのクワガタは、足が一本なくもう一本の足は折れて角も片方の半分が折れて、ひん死状態でした。私はそのクワガタに「クワ君」と名前をつけて、必死の思いでかんびょうしました。自力では歩けませんでしたが、少しエサを食べるようになり、とてもうれしかったです。でも思いがとどかなかったのか、死んでしまいました。

東京に住んでいる白いシェルティ、クララ。クララは三つのしょうがいをかかえています。一つは目が見えないこと。もう一つは耳が聞こえないこと。そして、もう一つはてんかんを持っていることです。クララの持つてんかんとは、発作的にけいれんが起こり、意識がなくなる病気。私がクララなら、つらくてたえられなくて、生きる勇気を失ってしまうかもしれません。殺しょぶん予定で動物一時預かりボランティアにひきとられたクララは、飼い主の愛子さんの元へやってきたのです。

散歩をしている時、クララを見た他の人は、「真っ白できれいな犬ですね。」と言い、しょうがいがあることを話すと、

「かわいそう。」

と言います。その度に愛子さんは、「クララはかわいそうではないのに…。」と思うのです。しょうがいを三つかかえたクララがかわいそうではない理由。それは、クララを幸せにするために愛子さんががんばっているから。だからクララは「かわいそう」ではないのです。

クララの得意技は、おすわりやダッシュ、ジャンプなど。でも最初のころは外に出ても一歩も前に進めませんでした。今、ここにクララがいたら、いろいろな事に迷ってしまうと思います。エサのやり方、散歩の仕方など、迷う事はたくさんあります。とてもむずかしい事ですが、私だったらクララにストレスをかけないために、自分で考えた方法で世話をします。何回も何回も考えた方法を試していくうちに、クララの好みも分かるし、クララとの信らい関係や絆が深まっていくと思うからです。

今、私のクラスではメダカを飼っています。夏休みで、十数匹いたメダカが三匹に減ってしまいましたが、子メダカが十匹ほどいます。私達何人かの女子は、メダカが死んでしまうと、うら山のお墓にうめに行きます。みんな、そのメダカの命の大切さを分かっているんだなと思います。

このような本や私の体験談を通して、私が感じた事は、「命の大切さ」です。どんなしょうがいを持っていても、けがをして死んでしまっても、短い人生でも、命の大切さは変わらないということを、改めて感じました。

私は今、野生動物の獣医師を目指しています。その仕事について、命を救ったり、命を守ったりするのが夢です。命の大切さを大人になっても伝えていって、みんなにもっと命の大切さをわかってもらいたいです。

書名『クラララ、いっしょに走ろう』
今西　乃子　著

（寸評）書き始めが工夫してあり、引き込まれるように感想文を読ませてもらいました。「障がいがある犬だけれど、かわいそうではない」「私だったら自分で考えた方法で何回も世話をして、信頼関係や絆を深めたい。」重いテーマに正面から向き合い、前向きに受け止めた素晴らしい感想文です。
命の大切さがわかるすてきな獣医師を目指して頑張ってください。

■小学校6年生の部　最優秀賞

私にしかできないこと

弟子屈小学校　山崎　美玖さん

私がこの本を選んだ理由は、作者の「金子みすず」という人が好きだからです。学校の授業でやってから、図書館で金子みすずの詩の本を借り読んだら、この人の詩は「とても良いな。」と思いました。特に一番好きなのが、この「わたしと小鳥とすずと」です。

私は今まで「私にしかできないこと」が一つも無いと思っていました。特別に勉強が出来るわけでもないし、この本のようなすごくきれいな詩が書けるわけでもないし、スポーツも抜群に良いとも言えないし、「特技」というものが無いのです。だから私は「人に自慢できるものがない私はダメなんじゃないか…。」とも思っていました。

私は、ピアノと習字と陸上をやっているけど、陸上の練習のためにしばらくピアノと習字を休んでいて、この二つは、あまり上達しません。もし休まないで一生けん命やっていたら、「特技」に発展していったかもしれません。

この詩は、「自分」「小鳥」「すず」のそれぞれが自分にしか出来ないことがあって、相手には相手にしか出来ないことがある、と言っていると思います。

例えば自分は小鳥のように空は全く飛ぶことは出来ないけれど、小鳥は私のように、地面を速く走ることが出来ない。このように、すずも同じだ。私が歌を歌っても、すずのようにきれいな音は出ないけれど、すずは私のように話すことはできない。みんなそれぞれ、出来ることと出来ないことがある。この詩を書いた金子みすずは、この詩の最後に「小鳥とすずとそれから私。みんなちがって、みんないい」と言う。私はこれを、私には私にしか出来ないことがあって、友達には友達にしか出来ないことがあり、それはそれで良いんだとみすずは言っているんだと思いました。みんな個性があって、みんなそれぞれちがう。それが面白いんだ…。そう思うと今までの私の考えはちがっていました。私には私にしか出来ないことが絶対一つはあるはずだ。それがいつ見つけられるか、いつ気づけるか…。それが問題で、私はまずピアノと習字のことを考えました。これからたくさんがんばっていけば、必ず上手くなると思う。どの習い事もがんばって「特技にしたいなあ」と思った。そして早く「自分にしか出来ないこと」を見つけたい。この詩を読んで、私の考えは大きく変わった。「みんながちがってみんないい」この言葉が大好きで「それぞれちがって個性があるところがいいところ」というメッセージが、強く伝わってくる気がする。友達が出来るからってあせらなくても良い、と思えるようになった。友達を目標にすることは、とても良いことだと思う。でも自分には自分にしか出来ないことがあるのだから、あせらなくても良いと思う。金子みすずがどういう気持ちでこの詩を書いたのかわからないけど、私はこの詩を読んで今までとはちがう考えを知って、私の考えも変わりました。私自身のことも友達のことも個性をみとめ合えるステキな詩に出会ったと思いました。

書名『金子みすず童謡集』から
「わたしと小鳥とすずと」
金子　みすゞ　著

（寸評）自分の考えを変えるような、素敵な作品に出会えて良かったですね。一つの詩をじっくりと読みこんで、自分なりの解釈をしていることがよくわかりました。
詩の世界に親しみ、口ずさめる詩があるということは、きっとあなたの人生を豊かにしてくれることでしょう。「自分にしか出来ないこと」をあせらずに探していってくださいね。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※児童の学年は、コンクールが行われた平成23年度当時のものです。